

(日置郡金峰町中津野)

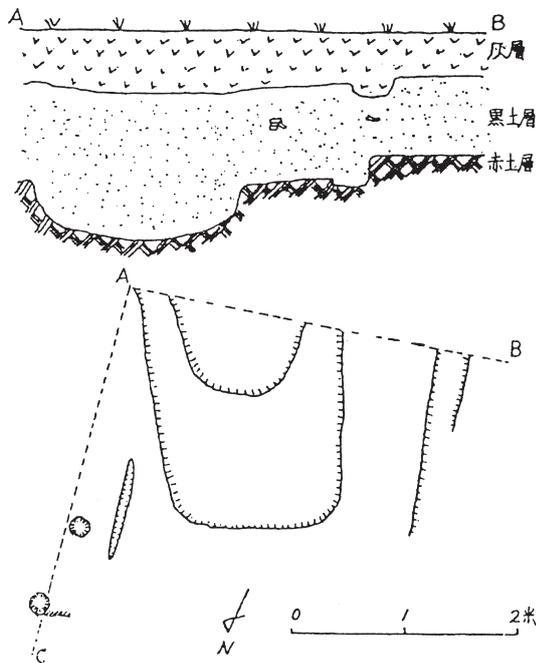
**位置と環境**

薩摩半島の西岸は、東支那海に面し、弓形に湾曲した砂浜海岸で、市来町戸崎以南、加世田市付近まで約40kmの間は所謂吹上砂丘を形成して、最高点は約60mの砂丘列が延々と伸びている。砂丘列の背後には金峰山地が南北に連なり、砂丘との間に細長い海岸平地がのびている。

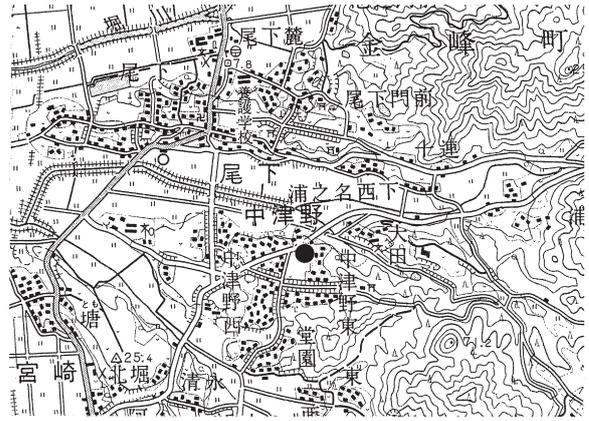
遺跡は、金峰山地中嶽の北西麓で、標高30mの台地上にあって、高橋貝塚の東2.5kmに位置している。中津野集落の県道に沿った坂口佐吉の宅地内に存在する。

**調査の経緯**

昭和25年に、坂口が宅地に隣接する一段高い畑地を、宅地と同じに、県道並みに約1m余り掘り下げたところ、一角から、夥しい量の土器が出現した。坂口は、南日本新聞社にこの遺跡の調査を依頼した。同社から委嘱された筆者は、昭和25年4月19日、南日本新聞社・記者小原と遺跡ほかに同行し試掘をおこなった。すでに完全な形を保った土器群を多量保管してあったが、試掘した結果さらに多くの完形土器を発見し、更に竪穴遺構も発見した。



第2図 土器を収納する竪穴



第1図 中津野遺跡の位置

同年5月3日より5日まで、玉竜高校生池水寛治をともなって残存部分の発掘を行った。

**遺構と遺物**

地層は、第1層は、灰褐色層30~57cm, 第2層は黒色土層50~70cm, 第3層は、赤褐色層で基盤となっている。第2層の黒褐色層の下部が包含層で、遺構は第3層の赤褐色層に掘り込まれている。

遺構は、地下げの壁面に阻まれて全貌は知ることができなかったが、径5m内外の竪穴を、黒土層面から70cmの深さの面から更に24~36cmの深さに掘り込んだ竪穴である。この竪穴は、周囲に幅30cm, 深さ6cmの溝を巡らしている。この竪穴の床面中央には、更に深さ36cm, 縦215cm, 横142cm(南東部は壁面に入り込む)の第2の竪穴が構築されている。第2の竪穴の床面中央には、さらに第3の、径120cm, 深さ18cmの略円形の掘り込みが構築されて三重の構造となっている。この第3の掘り込みには、完全な形を保った状態で残存した土器が約40個出土し、土器以外の遺物は発見されなかった。

**土器**

壺形土器、大形の楕円形胴部に外へ開いた口頸部がつき、胴部に一条の絡縄凸帯を巡らした丸底の土器。胴部の張ったものと、細長いものがあり、ほかに凸帯のない壺形土器および、無頸壺形土器がある。

甕形土器、胴部から頸部へ締め、口縁部へ外反する、中空の脚台のつく器形である。口縁部の外反する内面に、稜線がみられ、口縁部を接着した名残を残している。

蓋形土器，鉄兜に似た形である。大小あり，大型のものは器形が整っている。外面には凹凸があるが，内面はやや平滑で，明るい色に仕上げている。

小形手捏土器，小形で平底のもの・内面に篋の刻み目あるもの・中空の脚台をつけたものなどがあり，径は14～7cm大である。

この竪穴は，完形土器が数多く埋納されており，これらの土器を見ると，壺形土器では，下腹部に丸い穴を穿ったものがあり，壺本来の貯蔵には使用できない形に変形して，貯蔵以外の，例えば祭祀などに用いられたと思われるものがあり，また甕形土器では煤が付着しており，日常の生活で，炊餐に用いたことを示すものがある。すべての土器を観察して得られる印象は，焼き上がったばかりの新製品という印象ではなく，すでに何らかの用途に使用したものを集めて貯蔵したものという感じである。

今一つは，埋納された竪穴の構造である。周溝を巡らした竪穴住居遺構と考えられるものであるが，床面が三重の構造に作られた手の込んだものである。

一段目と二段目は生活面であろうが，三段目は大きすぎるように思われるが，炉穴であろうか！

しかし木炭・灰などの，焚き火をした痕跡は残っていない。以上の状況から見て，この竪穴は，土器を収納した時期以前にも，土器を収納した以後にも，住民の生活の痕跡が残されていないのである。従って，この遺構は，一度使用した土器の内から完形品を集めて，新たに竪穴を掘って埋納した遺構と考えられる。

時期は弥生時代の終末期から古墳時代にかけての時期に属するものであろう。

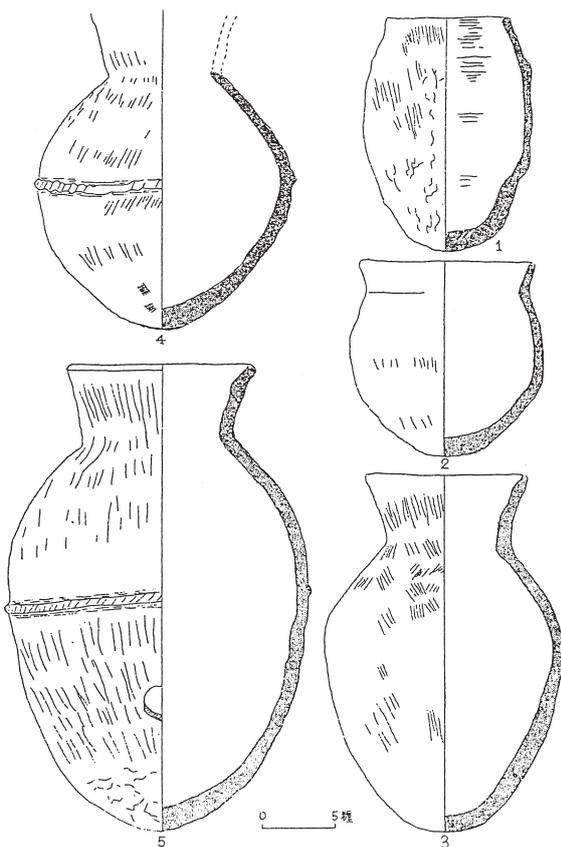
#### 資料の所在

出土遺物は，河口貞徳宅に保管されている。

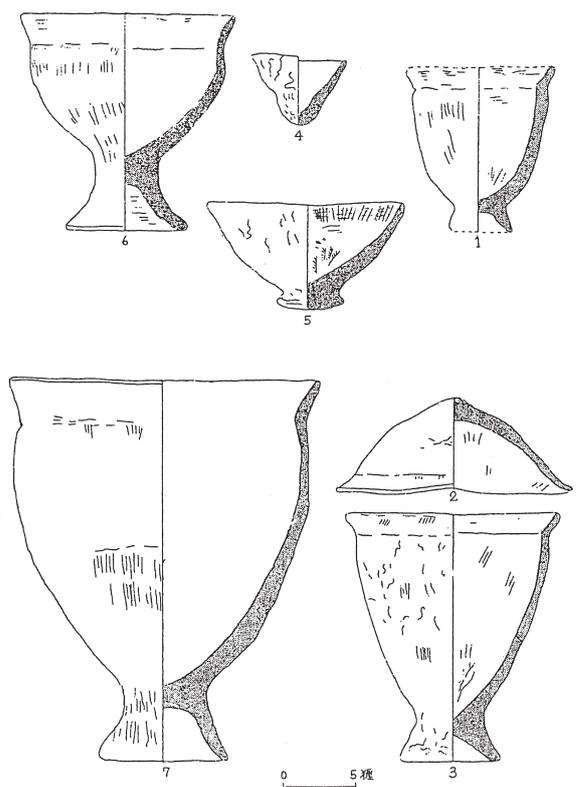
#### 参考文献

河口貞徳1952「鹿児島島の弥生式諸遺蹟について」『鹿児島県考古学会紀要』2号鹿児島県考古学会

(河口貞徳)



第3図 中津野遺蹟出土の土器（1）



第4図 中津野遺蹟出土の土器（2）